一日一題

「新参者」ですがヨロシク

岡山大地域総合研究センター
副センター長・教授　三村　聡

朝8時半、徒歩通勤。岡山大正門前の横断歩道で信号待ち。晩秋の津島キャンパスはイチョウの黄で一色に染まる。視線を上げれば澄みわたる空の青、それにカイノキやモミジの紅が鮮やかにとける。

傍らを学生たちの自転車集団が次々とハイスピードで通り抜けていく。ちょっとした通学ラッシュ。朝から学生たちの若い躍動が伝わってくる。歩行者はクルマよりも自転車に気を使う。岡山市内はフラットな地形で「晴れの国」、自転車がお似合いのまちである。

さて、岡山大は、森田潔学長のビジョンとして「美しい学都構想」を掲げ、「大学の総合的な地域連携と進展するグローバル化に対応できる人材育成」を目標に歩み始めた。私の役目は、総合的な地域連携の実現を目指し地域社会と岡山大を結ぶコーディネーター。設立して11月でようやく1年を迎えた岡山大地域総合研究センターに所属する。

高校卒業後は約30年間を東京で、その後の5年間を愛知で過ごした岡山を知らぬ〝新参者〟である。果たして与えられた任務を全うできるか、夏目漱石「坊っちゃん」の松山中赴任よろしく新鮮さと不安な面持ちでこの1年を過ごした。そこで出会い感じた岡山について、これまでの経験を踏まえながら「一日一題」を書き進めさせていただく。

まず、次週は冒頭の〝自転車〟を題材に「自転車が似合うまち」について。

2012・12・7

◇筆者紹介（みむら・さとし）
愛媛県西条市出身。法政大大学院修了。社団法人・金融財政事情研究会、現代文化研究所（トヨタ自動車研究所）、愛知学泉大などを経て2011年11月から現職。専門は協同金融とコミュニティ政策。53歳。

2012年12月7日 山陽新聞夕刊 3ページ　(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

一日一題

自転車が似合うまち

岡山大地域総合研究センター
副センター長・教授　三村　聡

世界の観光都市といえばパリ。そのパリでは約３００ヵ所おきにレンタル自転車の駐輪施設があり、まちは自転車であふれている。通勤利用が多いが、観光客にも大人気だ。歩いて凱旋門からエッフェル塔、モンマルトルの丘は遠すぎる。

車線規制により公共交通優先の道路が増え、片側２車線道路のうち１車線はバス、タクシー、自転車の専用レーンだ。バスも便利だが、フランス語の路線図を読み解くのは少々厄介。また、タクシーは料金が割高だ。地下鉄も便利だが街並みが見えないのは残念。

とすれば、レンタル自転車を使わぬ手は無い。30分以内なら無料、借りる際のクレジットカード利用に最初は戸惑うが、慣れればとてもお手軽。このシステムはロンドンをはじめ欧州の多くのまちで急速に普及している。朝、宿泊先のホテルや駅の近くで借りれば、一日楽しめる。うれしいことにどこの駐輪場でも返却できる。実質的に乗り捨てが可能な仕組みである。

日本では富山市で導入された。借りようとしたが、あいにくの雪でサドルは真っ白。晴れの国はめったに雪が降らない。後楽園や岡山城、西川緑道公園かいわいや表町、ＪＲ岡山駅西口にはカンコースタジアムや岡山大などが密集し、何といっても岡山市内はアップダウンが少ない。

ただし岡山市が「コミュニティサイクル社会実験」を実施したが、利用者は少なかった模様。パリのように民間企業が自治体や警察と連携してダイナミックな仕組みを導入できないものか？　市民が自治体、企業、大学と連携して知恵を出し合い「自転車王国おかやま」を実現したい。

次週は「移動する権利」について。

2012・12・14

2012年12月14日 山陽新聞夕刊 3ページ　(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

一日一題

移動する権利の再考

岡山大地域総合研究センター
副センター長・教授　三村　聡

ＪＲ岡山駅に列車が到着。山陽線、瀬戸大橋線、伯備線、赤穂線…。降車する人々の波に乗り換えを告げるアナウンスがこだまする。何番線へ行けばよいですか？　初めての人は戸惑うほど岡山駅構内は中四国一のにぎわい拠点。

古来より、わが国には、地域コミュニティー自らが道を普請し街道を守ってきた歴史と文化がある。誰が植えたか後楽園の旭川沿いには巨木の桜並木が続く。倉敷をはじめ岡山の都市は美観に優れた町並みをとどめる。明治以降、主要な街道とまちを基点に鉄道網が整備され、戦後復興とともにバス路線が広がり、地域コミュニティーは互いに交流しながら独自の歴史や文化、そしてにぎわいを育んできた。

近年、「道は誰のものなのか」という原点回帰の論議が注目されている。本来、道は官民共同利用の顔を持つ。街道の往来に軒を連ねる民家の庇・軒下は、昼間は店舗の一部や露天商が商う民の顔、夜は往来に使う官の顔として利用され、自由に往来する人の移動から多くの商店街や都市は生まれた。

中心市街地からにぎわいが消え、それが都市機能の低下と人口減少を惹起する。根底には、移動する権利の衰退と官民互いがなすべき義務の脆弱化が横たわる。財政難、高齢社会、都市間格差、そこでの移動の問題は、市民参加なくしては議論できない段階にきた。

いまこそ、道に連なる歴史や生活文化と地域人の心を紡ぎ、市民が生活の豊かさを甘受できる権利として、自由な移動権の確保と、同時に地域の共有財産として道の価値を再発見する取り組みを始めよう。

次週は道・まち・モビリティの関係について。

2012・12・21

2012年12月21日 山陽新聞夕刊 3ページ　(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

一日一題

道・まち・モビリティーの関係

岡山大地域総合研究センター
副センター長・教授　三村　聡

JR岡山駅でバスを降りる。駅前は桃太郎大通りと市役所筋が交わり立派。都市空間も百貨店や飲食店、専門ショップでにぎわう。また、クルマはもちろん、バスやタクシー、路面電車も頻繁に往来する。

しかし、「もう少し路面電車への乗り換えが便利ならいいな」「もう少し駅近くに駐車できないかなあ」といつも感じる。つまり、道路や都市空間、移動手段は利用者＝市民を幸せにしているか気になる。

これまで道は道、クルマはクルマ、まちはまちとして、個別に考えられ進化してきた。道路整備は道路延長（造る）に力点を置く発想。移動手段はさまざまな生活シーンで人がどのような移動ニーズを持っているか考えなかった。

今後は「使う観点」や「使い方の工夫」を重視して交通を路車一体として捉える視座とシステム思考が大切だ。通勤・通学・買い物・医療・介護など日常的な活動圏から住民のモビリティー（移動性）や道路に対するニーズを把握し、導出されたニーズを都市計画・まちづくりに反映させ、地域の実情に応じた最適なルールを見いだし道路の機能分担を明確にしたい。

また、個別と公共交通を組み合わせ、多様な選択が可能なマルチモーダルな交通システムの整備が夢の実現に向けた第一歩だ。

岡山を見つめ直し、中心市街地エリア、観光地エリア、中山間地エリアなど「都市の持つ顔」ごとにユーザー目線でエリア特性に配慮した『モビリティーデザイン』を描ければ、中心市街地ではさらに路面電車は利用しやすくなり、必ずや路線も延伸できよう。財源難は世界共通の課題だから理由にはならない。

年明けは、初夢「危機突破内閣」。

2012・12・28

2012年12月28日 山陽新聞夕刊 3ページ　(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

一日一題

岡山大地域総合研究センター
副センター長・教授　三村　聡

初夢「危機突破内閣」

〝イオンがセール、マクドナルドまたまた100円商品投入、吉野家が値下げ〟。1社が生き残るために値下げ行動をとっても、同業他社が同じ行動をとると、実は逆に企業利益や賃金にマイナスの影響となり、みんなが損をする。これがデフレスパイラルの一要因。経済学では「合成の誤謬」と呼ぶ。

この状態を脱すべく安倍「危機突破内閣」の経済政策に国民の期待は膨らむ。すでに日本銀行がインフレターゲットに踏み出す中、新総理は2%のインフレ目標を設定。なお一段のインフレターゲットと金融緩和により、デフレからの脱却、円高の是正、経済成長を目指しマネーを市中に投入、景気浮揚を推進する構えだ。

長くゼロ金利が続き「神の見えざる手」は機能不全、残された金融政策はこれしかないのも事実。つまり、企業活動が活発になり、モノやサービスが売れ始め、企業利益と賃金は上昇、購買意欲は上向き、企業はさらに生産を拡大。これが内需拡大のシナリオ。

ただし、企業が「お金貸しますよ」といくら銀行に言われても、設備投資や新規雇用に動く経営者が少ないと大変。しくじると物価ばかりが上昇、賃金はすぐには上がらず、とりわけ年金生活者は悲惨だ。パートやアルバイトの時給は上昇しても、公務員をはじめ正規雇用労働者の賃金は伸び悩む。消費税は上がり、国債の信認に臨界点が迫る。

今年は巳年。うまく慶樹（景気）に巻きつき天に舞い上がれるか、それとも地の底へ逆スパイラルするか、岐路に立つ日本。みなさまの初夢はいかに。

次週は「駅前にイオンのあるまち」について。

2013・1・4

2013年1月4日 山陽新聞夕刊 3ページ (C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

一日一題

駅前にイオンのあるまち

岡山大地域総合研究センター
副センター長・教授　三村　聡

〝先生、岡山駅前にイオンができるんですよね〟、「来年秋オープンみたいだね」。〝先生はイオン効果をどう考えますか？〟「さて、どうでしょう。岡山駅から至近だから、何かと便利になることは間違いないでしょうね。あなたはどう思いますか？」。〝私はイオンができると、結構、通うと思います〟。「その魅力は？」、〝よく友人と倉敷イオンや三井アウトレットパークへ出掛けます。ショップやアミューズメントが豊富で楽しいからです〟。

「デートもしますか？」、〝はい、確かに。流行の服やグッズを見て、食事やお茶をして、映画を見るフルコースです〟。「当世の若者のトレンドなんですね」、〝うーん。でもイオンやアウトレットだけだと、つまらないかも〟。

「それはなぜ？」、〝イオンやアウトレットは楽しいですが、天満屋や高島屋をぶらぶら、商店街や路地をぶらぶら、時には後楽園や倉敷美観地区、美術館にも足を延ばす。それぞれ気分が違うし、どれも私の生活に大切です。移動も徒歩や自転車、バスや路面電車、そしてマイカーと、その都度自由に選びたいです〟。「そのココロは？」、〝色々あった方が、まち歩きは面白いから。だって時々の気分や目的に合わせて多様な選択肢があった方が新しい発見や感動の機会が増えるし、何よりそれがＨａｐｐｙだから〟。

「なるほど、まちはみんなの財産です。学生も社会の一員。楽しむだけでなくその財産を守り、育てる立場でもあります」、〝了解です。キャンパスから飛び出し、まちづくりに参加して、まちをピカピカに磨きたい気分になりました〟。

次週は、「真価を問われる平成の大合併」について。

2013・1・11

2013年1月11日 山陽新聞夕刊 3ページ　(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

一日一題

真価を問われる平成の大合併

岡山大地域総合研究センター
副センター長・教授　三村　聡

「15、10、2」。この並びは、岡山県の市、町、村の数である。明治維新以降、わが国は大きな合併を3度経験した。明治初期には全国で7万を超えた町村が、20世紀末には約3000市町村、現在は1700台まで減少した。

「合併とは無縁」と答える方は少数派だろう。では何のための合併か？　その理由は、基礎自治体の財政基盤強化（合併自治体へ期間10年限定で手厚い財政支援）、また岡山市は政令指定都市となり国に直接モノが言える、などだ。一方、なじみの名称が消え、平仮名、カタカナ表記や香川県より広い面積を持つ自治体が出現するなど、さまざまな変化を経験した。

さて、地域コミュニティーの最小単位は小学校区、あるいは中学校区であると言われてきた。シンボルとも言える学びやは、多くの子どもたちや卒業生を見守ってきた。旧内山下小学校（岡山市・築約80年）、旧吹屋小学校（高梁市・築113年）などは廃校となるも現存する岡山を代表する歴史の証人だ。

古くから地域コミュニティーでは、学校が、学校教育ばかりか地域と連帯して固有の歴史や文化、慣習や共助の精神を教え、実践する社会教育の場として機能してきた。その起源は閑谷学校にある。

教育県とうたわれた岡山県。いま未曽有のいじめ問題や学力低下に苦しむ。教育問題は教育委員会や学校現場だけではなく、地域社会全体の課題として捉えるべきである。「平成の大合併」が、地域住民、とりわけ次代を担う子どもたちに対して、地域社会への信頼や誇り、夢や希望を与える新たな起点となりえたか。いま、その真価を問われる時期が来ている。

最終回は「大学改革」について。

2013・1・18

2013年1月18日 山陽新聞夕刊 3ページ　(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

一日一題

学長の大学改革宣言

岡山大地域総合研究センター
副センター長・教授　三村　聡

大学は組織として地域の課題解決に取り組んでいるか、学生は大学で学んだことを社会で生かしているか、親は家計を切り詰め学費を工面するが就職難でモトも取れない―。これらが「大学の課題」として指摘され久しい。

一方、「大学生の特権」は、自由に自分の時間を組み立てられる点にある。もちろん、ゼミ、実験、実習、卒論など大学生は忙しい。その合間を縫って、研究者を目指す、語学力を磨く、留学生と互いの国民性を理解し合う、部活やサークルに打ち込む、資格を取る、被災地支援ボランティアに参加する―など。つまり、こうした自分探しの時間を自由意思で生み出せる、そこが高校まで、そして社会人とも異なる特権。この「大学の課題」と「大学生の特権」のはざまに橋を架ける方策の考案、それが大学改革か。

森田潔岡山大学長は年頭所感で「どれほど豊かな教養と優れた専門知識があっても、それらの知識を自分の成長と社会、人類の発展に積極的に用いようとする気概がなければ、それらの知識は、無意味なものとなり、また困難な現実を打破することもできないでしょう。私は、この気概の養成という教育課題を、大学が真剣に向き合う中で達成したい」と宣言した。

学生たちが地域社会へ出て、自らが課題を発見、対話を通じて解決策を探求し実践展開する。仕上げに実践知を専門分野から振り返る。こうした知行合一とも言える実践知から強靭（きょうじん）な自己を確立、同時に人の意見に真摯（しんし）かつ柔軟に耳を傾け集団行動ができる人材を養成。換言すれば、光輝く晴れの国を担う気概にあふれる学生づくり、それが岡山大の考える大学改革。皆さまの応援をよろしく。

2013・1・25

2013年1月25日 山陽新聞夕刊 3ページ　(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。